

冗 聞 淘 泡 社 説

民黨は明治政府の改革者として起りしものにして今日自から政權を握りたるに付ては改めて野に在りしとき民黨は頗りに官吏俸給の減額、元員淘汰を主張したり今日に於ては再び如きも其一として是非とも行はざる可らず専らに在りしとき民黨は頗りに官吏俸給の減額、元員淘汰を主張したり今日に於ては再びな思ひも寄らざる所にして下級の觀に對しては寧ろ増給も必要なれども官吏の員數に至ては大に節減の餘地あるを信する其本策は元來役所の氣風は甚だ緩長にして眞面目に仕事するものの少なきは何人も認むる所なり上級の費ば一種の職務にして何事も自から辨せず一通の書面を認むるにも下僚に命じて起草せしめ其草案を檢閱して更らに措置せしむるなき種々の手續を費すの例にして其下僚なるもの勉強したればとて譽めらるゝに非が有るも此らるゝみどなし云はゝ情け放題と云ふ有様にして今日の仕事を明日に延ばし一時間の用事に一日を費して事務が堆積すれば乃ち人手不足と稱して別に幾多の雇員を置き以て仕事を分つの例なり聞く所に據れば或省の如き官吏の總數は三百人内外にして給仕は三十餘名小使は四十餘名ありと云ふ三百名に對して七十餘名の小使給仕とは随分少なからぬ數にして民間の銀行會社などには其例に乏しきもとならん此一事を見ても役所の氣風は大抵塞々々々しき手續多しと云ふ例へば省内の參事官會議などはす場合には給仕をして其官を當人に通せしむるか若しくは一通の書面文は持の者は又繁文の弊を助长す役所の中には實に馬鹿て持題はらしむれば用は十分辨不可きに態々に召集狀の印刷とは駄々入たる次第と云ふ可知り役人を採用するに當人の歴性行は甚だ明白にして更らに開ひ賣すの必要なきも若しも當人が職の役所に赴職したる者ならんには該職會するの規則にして其應會文は持の者と申すと申すして大臣次官の捺印を求める後は手續を経て各官署中休暇を得るの例なれどもくは事務に差支へざるみどならん現に毎年暑中に至れば半ドントモ請して半日しか歸がざる事の例であるが、當間より大半減して請假の権限を失はれて以て元員淘汰を察するに足る可じ元員を淘汰したればとて固より何程

○大石農商務の演説

位の事でウカ／＼として居ると遂に日本人の得たる軍事以外の智識技術を伸ばす道なくして我が伸さんとしつゝある土俵は削られて仕舞ひはせんか即ち是れは支那である支那の戦争に依て其奥相を暴露した暴露したから歐羅巴の強國が四方八方から侵入して来る此支那の今日の形勢を喻へて見ると丁度船を暗礁に乗り上げてさうして四方から水が這入つて居るやうな有様である若し此支那の内外にて一變動即ち風波が起つたならば此船は直ぐ沈む幸にマダ支那と云ふ船體は暗礁にゐる堅牢と云ふ爲に國が今日漸く保つて居るのである云ふものは餘程危険な處に落込むと云ふみどりは決して過言ではない物の數に於て然り以上は決して其穴の癪ゆる氣遣ひはない何とも此水が浸入して遂には支那の全帝國と云ふのもは餘程危險な處に落込むものではあるが此船は直ぐ沈むと云ふであらうが是れは只言葉を飾つて居る云ふのである、けれども此世界の學問一形勢と云ふものは決して之を許さぬ又此歐羅巴の文明、進んで居る所の國の勢力が段々未開國の國に膨脹するが爲めから云へば何にしても利益なりと云ふと云ふ爲に國が今日漸く保つて居るのである云ふものは是れは全世界の爲めから云ふほどは是れは全世界の爲めから云ふのである、けれども此世界の學問一形勢と云ふものは決して申せば何處までも亡びる國を存しなければならぬ弱國を扶けなければならぬと云ふ譯では無いが是れは只言葉を飾つて居るだけ是れは専らの自然で膨脹して行くと云ふうに種々多勢力が未開國の國に向つては日本人は宣ふべきは我モ亦宜しく日本の文明を輸入して而云ふ時は即ち是れは如何なる人間も神さやかに勝服して行く其極未開國の風俗習慣が毀され其國體政治と云ふものが亡びて文明國の國の爲めから云ふべきは學問的殖民的に膨脹しなければならぬ此現状を維持して其形を保存して平和を保つと云ふほども又其形の上に段々此優勢を發揮する大団扇を軋らなければならぬ（拍手）

英吉利の方に免れ掛つて來た即ち英吉利の懷に迷込んで來たから支那を助けたシヨで英吉利は恩ひも寄らぬ諸かりものとした何であるか支那の沿岸河流に向つて恐ゝ歐羅巴の蒸氣船を泛べるふとに而して而して内地交通の權を得た失れから威脅術、威嚇術は一向英吉利では欲しく思はんが向ふから持て來て何うか此處を預つて與れと云ふふとになつて來た正か預かつて與れとも寧まなかつたであらうが勢ひ附う云ふ譯になつた——ソレが爲め國らざる利益を得たと云て居る素と露西亞が旅順大連湾を占領せざる昔より英吉利の位置と云ふものは支那に於て強かつたのであるが支那が英吉利の懷に迷込んで來たと云ふ言葉の間に深い意味がある所謂此支那と云ふものが一段々支那の有力な政治家が何うしても支那は日本に依て軍事上の改革を圖らねばならぬ續る其前に李鴻章、李鴻章などは遙か十年も十五年も前から能く内外の形勢を辨へて居るがにも遂込んで來たと云ふのは近頃では支那の一の強國の侵略を恐れて又一の強國の助けを求めに行たと云ふとは是れは事實であるが當に英吉利にのみ迷込だ譯ではない即ち日本にも過ぐるも翌日には謀叛を起したいから日本に依て軍事上の改革を圖らねばならぬ續る張之洞は有名な政治家で分つた人であるが日本勢力を擴大せし重要複雑なるものは日本から礦山若くは鐵道の技術を輸入れたいと云て今日の支那は手を擣げて此日本人を歓迎するを云ふに付ても日本より大仕掛である又其製造の材料も殆んど世界無比其他日本人が學問上に得た有様である即ち此際が日本人が平和的文明的の勢力を膨脹すべき好機會である殊に支那の智識技術を以て手を振て餘くと云ふ大市場となる云ふものは支那を取除けて殆んぎないと云て經濟上——貿易製造に於ては日本人が學問上に得た所も亦盛にせんければならぬ又財源も日本に依て經理し其他學問凡て農事工芸等の學問も何うしても日本に依て造らなければならん(拍手喝采)ても造らなければならん(拍手喝采)

○ 業務省の第三文書略
商務省貿易規定第二章には「二

に交付し
し以て誰
題に對し
の訂正を
をして其
の通算と
して其の
運形式の
に其の許
なさやど云
合ひ一年の
に至る半年
錢にして小
り氣候風雨
外鹽と煩
地方にあり
様し得るの
に至る半年
尻、播州、廣
十州鹽業地
田羅持の策
ために押され
て其製鹽中
食鹽には尙
鹽田面より
牛產費一圓
なり彼の廣
ては更らに
食鹽は其製
らす否事ろ
(食鹽は二十
三十三四度
其他器械使
鹽田面より
牛產費一圓
に對抗し難
て製鹽法を
べく隨て之
は多少の利
益は多少の利
益を有せ
す之を再
し品質好惡
西洋流の製
鹽を存せ
ムなり大要
庶幾くは第
二昨三日伯
シタる電報
ビスマル